

みんな みんな いいこ I



すずはら なずな

だんごむし

「ついてくんな。」

お兄ちゃんに おいてきぼりにされて
お外で しゃがんで 泣いてたら

ユイちゃんの くつの上 そろりそろり、
ダンゴ虫 一匹、乗ってきた。

あれ、あれれ ダンゴ虫
こんなところに いっぱいいるよ。

あっち チョン。 こっち ツン。
みんな コロコロ ダンゴになった。

面白くって 面白くって
ユイちゃんは 夕方まで 夢中になって
だんご虫と遊んだんだ。

次の日 ユイちゃんは ビニール袋を持って お外に出かけた。

コロコロ まるい ダンゴ虫、袋にどっさり 集めたんだ。

ママ、見て すごいよ。こんなに ダンゴ虫。

玄関で ママを呼んで 得意になって 見せた。

ママの顔が すーっと青くなって

ユイちゃん、お家に入れちゃダメ。

逃がしてきてね。お願いよ！

ママは あわてて部屋に入っしまい、

手だけ出して、早く、早くって ユイちゃんを追い出した。

ママ、ダンゴ虫 かわいくないのかな。

ユイちゃんは 一匹 一匹 さよなら言って 戻してやった。

次の日 幼稚園のお絵かきの時、ユイちゃんはダンゴ虫 描いた。

のぞきこんだアリサちゃんとエリカちゃんは
つつき合って 「いやーん」って言って 笑ってた。

次の日も、その次の日も その次の日も
ユイちゃんは ダンゴ虫 描いた。

好きなもの描きましょうって マサエ先生は言ったのに

「うーん、ユイちゃん、他のもの 描いてごらんよ。」
「ほーら、色んな色 使うと楽しいよ。」

そして、お迎えに来たママと、真剣な顔で ヒソヒソ話してた。

ダンゴ虫・・・だめ？

ユイちゃんは、今日は ダンゴ虫、3匹並べて 描いてみた。

このごろは のぞきこむ女の子も いないんだ。

ユイちゃんが 「出来上がり」 って クレヨン置いたとき
突然 うしろから、大きな 大きな声がした。

「お～ ユイちゃん、ダンゴ虫かぁ、おもしろいなぁ！」

ときどき ユイちゃんの組にもやってくる おとこ先生だ。

「な、ユイちゃん、今日のダンゴ虫、先生にくれなかな？」
変なこと言う たっちゃん先生。

「ちょっといいこと思いついた。それ 切り抜いてもいい？」
たっちゃん先生 ユイの嫌なこと しないよね？

ユイちゃんは、お絵かき帳を 先生に差し出した。

先生は エプロンのポケットから はさみを出して
今 作ったみたいなの、でたらめの「ダンゴ虫のうた」 歌いながら
ユイちゃんの 3匹のダンゴ虫を
チヨキチヨキ チヨキチヨキ 切り抜いていく。

集まってきた みんなの顔を、ぐるっと見てから
たっちゃん先生は、

「さて さて、 ナニが 出るのかな〜？」って言って、
手品みたいに、今度は 割りばしを 3本 出してきた。

そして 3匹のダンゴ虫の裏がわに
セロテープで ペたっ ペたっ ペたっ て くっつけたんだ。

たっちゃん先生の だんご虫劇場は 大人気。
ユイちゃんに笑顔 やっと 戻った

ちょうちょ

たっちゃん先生が 何かたくらんでいる。

お散歩の時間 アリサちゃんは ピンときた。

たっちゃん先生たら

変なかたちの 大きな紙包みを持って

ついて来るんだ。

マサエ先生が、

「よそみしないで！ まっすぐ二列！」

って、いくら言っても

皆、たっちゃん先生の まわりを

ヒラヒラ 行ったり来たりして

先生のナイショの計画を 知りたがっていた。

「わあ・・・」

公園についた 皆は

目をまん丸にして いっせいに声をあげた。

ひらひら ちょうちょが

あっちにも こっちにも。

みんな きゃあきゃあ 言って、てんでに追っかけはじめた。

そしたらね、たっちゃん先生 みんなを集めて、

「さて さて 何が出てくるでしょう。」

持ってきた 紙包み カサカサ開けたんだ。

出てきたのは 虫取りアミ。
もち手のところが グーンと伸びるヤツだ。

「やったー。」

アックンが さっと つかむと
いきなり ブンブン 振り回す。

あんまり めちゃくちゃに振り回すもんだから、
アリサちゃんも みんなも、大騒ぎしちゃったんだ。

ちょうちょ びっくりさせちゃった。

アツ君から アミが まだ、
誰にも回してもらえないうちのことだった。

マサエ先生が 知らない女の人に しかられた。

「ちょうちょが かわいそう。

こんなに大勢でやって来て、なんて乱暴なんでしょう。」

お婆さんは、カンキョウホゴとか アイゴノセイシンとか
難しいことを いっぱい言った。

マサエ先生は黙って聞いて、あやまっていた。

追いかけまわしたり、アミでとったりしたら、
ちょうちょがかわいそうだ

・ ・ お婆さんがそういってることだけは、
アリサちゃんにも解ったよ。

だけど、アミを片付けた後の お散歩は つまらなかった。

マサエ先生は 「騒がないで」とか 「走らないよ」 とか
「ほらほら 他の人に迷惑よ」 とか

注意 ばかり。

たっちゃん先生は、マサエ先生に
「今日は もう、勝手なことしないでくださいよ。」
って こっそり 言われてた。

だから それからは ずっと
「アンゼンカクニン」とか「ユウドウ」とかばかり やっていた。

でもね、そんな たっちゃん先生の まわりを、
幼稚園に帰るまで ひらひら ひらひら ちょうちょ
ついてきてたんだ。

先生とちょうちょ 仲良しだ。

アリサちゃんは なんだか ちょっと ホットした。

そうしてね、アリサちゃんは もうひとつ 気が付いている。

たっちゃん先生 幼稚園に着くころは もう

歩きながら、フンフン でたらめ歌 歌ってた。

そして 鼻の下キューンって伸ばして、
目、クリクリ させたんだ。

これって、 たっちゃん先生が

何かまた いいこと 思いついた証拠なんだよ。

どろんこ みずたまり

マサエ先生は この頃ずっと 「一つくくり」だ。

エリカちゃんは マサエ先生が大好きだけど
前みたいに かみの毛を「二つくくり」にした マサエ先生のほうが
もっと もっと いいと 思う。

だから 朝 ママに かみの毛をくくってもらう時、
「二つくくりにしてね。」
って 言いながら
今日 先生も 一緒だったら いいのにな と思う。

だけど やっぱり 今日も
マサエ先生は「一つくくり」だった。

昨日の 雨で 幼稚園のお庭は どろんこ 水たまり。
エリカちゃんは お気に入りの
ひらひらの くつしたを汚さないように
カサをつえにして ゆっくりゆっくり歩いてた。

「あっ」

突然 タカくんが ぶつかって
エリカちゃんは よろけた。

どろんこ 水たまりに バッシャン 足が入って、
くつしたが どろんこ 水玉もように なった。

ママにおこられる！

エリカちゃんは 泣き出した。

マサエ先生が 飛んできて タカくんをつかまえながら
「大丈夫よ、先生 すぐ 洗ってあげるね。」
エリカちゃんのくつした脱がせてくれたんだ。

「わざとじゃないもん。」
タカくんは ぷう とふくれた。

でたらめの「アマガエルのうた」を歌いながら
たっちゃん先生が やって来た。

うしろで みんながケロケロ カエル軍団になって
みずたまり ピョン ピョン 飛んできた。

くつ下持ったマサエ先生と 泣きべそ顔のエリカちゃん、
ふくれっつらの タカくんを見て
たっちゃん先生、何て言ったと思う？

「くつ 脱いだら、くつ、汚れないなあ・・・
くつ下はいてなかったら、くつ下も大丈夫・・・。」

たっちゃん先生の目は もう くりくり 輝いている。

「やったー。オレ 一番！」

こんなことには すごくカンがいい ユキくんが
さっさと はだしになって 水たまりに 飛び込んだ。

タカくんも 飛び込んだ。
サキちゃんも 飛び込んだ。

「マサエ先生、マサエ先生も アマガエル！」

「エリカちゃん おいでよ。
気持ち悪いけど 気持ちいいよお。」

みんなが 呼んだ。
たっちゃん先生も呼んだ。

エリカちゃんは そおっと つま先を どろんこにつけてみた。
横に並んで きれいな白い マサエ先生の はだしの足が あった。

エリカちゃんと マサエ先生は 顔を見合わせて
クスリと 笑ったよ。

あらい場に どろんこ足が ずらりと並んだ。
大きな たっちゃん先生の足も 一緒に 並んだ。

大きいタオルで マサエ先生が みんなの足を
順番に 拭いた。

マサエ先生、自分の足も 洗って 拭いた。
マサエ先生、鼻のあたりに どろんこついてるよ。

みんなが笑った。
マサエ先生も 笑った。

お迎えに来た ママたちの顔ったら おかしかった。

「このまま 習い事に連れて行く つもりでしたのに。」
エリカちゃんのパママは ちょっと 怖い顔をした。

園長先生が 出てきて 謝った。
マサエ先生も たっちゃん先生も 謝った。

だって みんな 足だけじゃなくって、
かみの毛にも 下着にも どろんこ ついちゃってたんだもの。

だけど エリカちゃんは ママのうしろから
マサエ先生に 合図した。

今度は お着替え持って来るから
ぜったい ぜったい また やろうね。
楽しかったね。
すごく すごく おもしろかったね。

明日は マサエ先生、きっと
「二つくり」してくるよ。

エリカちゃんは そんな 気がした。